

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 9 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520678

研究課題名(和文) 朝鮮出兵における軍目付の機能および実態の研究

研究課題名(英文) The Study of the Functions and Actual Conditions of Military Inspectors in Toyotomi Hideyoshi's Invasions of Korea

研究代表者

津野 倫明 (TSUNO, Tomoaki)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：60335916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、豊臣秀吉が引き起こした朝鮮出兵(文禄の役・慶長の役)における軍目付らの機能および実態を解明することを目的とした。日本側の文献史料の分析および大韓民国における倭城(日本側が朝鮮半島南部に築城した城)の現地調査の結果として、軍目付らの軍事行動や軍目付らと諸大名との関係、軍目付らの豊臣秀吉への注進(報告)、そしてその注進にもとづく豊臣秀吉による諸大名に対する賞罰(知行地の加増および譴責)などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to elucidate the functions and actual conditions of the military inspectors in Toyotomi Hideyoshi's invasions of Korea. As a result of analyses of Japanese historical documents and investigations of old Japanese castles in the Republic of Korea, I revealed the campaigns of the military inspectors, their relationships with the numerous daimyo, their reports for Toyotomi, awards and punishments given by Toyotomi, and other matters.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：国際研究者交流 大韓民国 日本史 朝鮮出兵 軍目付

1. 研究開始当初の背景

(1) 朝鮮出兵(文禄の役・慶長の役)は戦略・論功行賞をめぐる諸問題を通して豊臣～徳川移行期の政治史に多大な影響を与えたが、1990年の段階でも出兵時とくに慶長の役における諸大名の動向は十分には解明されていなかった。そこで、研究開始まで慶長の役におけるそれを解明してきた。

(2) 上記の解明を前提する、慶長の役に際して設置された軍目付の機能・実態の解明が新たな研究課題となっていた。なぜなら、軍目付の報告が戦略・論功行賞に関する秀吉の判断を左右し、さらにかかる判断が諸大名の党派形成につながってゆくからである。監察・報告といった軍目付の機能・実態の総合的な解明は朝鮮出兵研究のみならず、豊臣～徳川移行期の政治史研究においても待望されていると考えた。

2. 研究の目的

(1) 何ゆえ慶長の役に際して軍目付が設置されたのか、またどのような方法での報告が期待されたのかを解明する。

(2) 実際には、軍目付は朝鮮においてどのような行動をとり、またどのような機能を果たしたのかといった実態を解明する。

3. 研究の方法

(1) 主たる方法として文書を中心とする関連史料の収集と分析を採用した。収集に関しては、原文書・影写本等の撮影・複写・筆写による調査と刊本の購入・複写を実施した。なお、前者に関しては効率性を考慮して随一の史料架蔵量をほこる東京大学史料編纂所における調査を重点的に実施した。

(2) 軍目付と関係の深い大韓民国の倭城跡の現地調査も取り入れた。具体的には、軍目付も参加した存廃議論の対象となった蔚山倭城跡・順天倭城跡、軍目付らが在番した泗川倭城跡、また巨濟島海戦(唐島の戦い)と関連する永登浦倭城跡などを立地条件に注目しつつ調査した。

4. 研究成果

後掲の「5. 主な発表論文等」に掲載した論考・発表に言及しつつ、年次ごとに研究成果を整理する。

(1) 初年度にあたる2010年度は倭城跡の現地調査はひかえ、予備的な史料調査を含む史料収集を実施し、次年度以降の本格的調査・分析を実行しうる態勢を整えた。

史料調査の実施状況は次のとおりである。7月、東京大学史料編纂所において藤堂文書などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。2月、福岡市博物館において筑紫家資料の調査(閲覧・撮影)を実施した。また、東日本大震災のため繰越により、翌年度の2011年7月、東京大学史料編纂所において浜文書などの調査(閲覧・筆写・複写など)を実施した。史料分析の状況は次のとおりである。慶

長の役に際する軍目付任命に関する豊臣秀吉の意図について、軍目付早川長政宛の長宗我部元親書状などの諸史料を分析した。慶長の役における戦線縮小論に関する諸史料を分析し、次年度以降の倭城跡の現地調査において「川越」「大河」「船付」「干潟」などを重視すべきことを認識した。

研究成果発表の状況は以下のとおりである。前記の元親書状の分析などにより、研究成果として〔雑誌論文〕を発表することができた。同論文では、元親が軍目付一直に対する平身低頭の態度を堅持していたと考えるべきことなどを論じ、それらをふまえて軍目付の実態や諸大名との関係を解明するための作業仮説を5点にわたって提示した(秀吉に近侍しうる人物であることが軍目付抜擢の必要条件の一つとして仮定されるなど)。この作業仮説は本研究の道標となった。

(2) 2年目にあたる2011年度は前年度の予備的調査をふまえて、史料調査を含む史料収集と倭城跡の現地調査を実施し、史料の分析も進めた。

史料調査の実施状況は次のとおりである。2月、東京大学史料編纂所において厚狭毛利文書などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。3月、東京大学史料編纂所において朝鮮陣朱印類などの調査(閲覧・筆写・複写など)を実施した。現地調査の実施状況は次のとおりである。12月、戦線縮小論で存廃議論の対象となった順天倭城および比較的近くの泗川倭城の城跡などを調査した。この調査により、議論の論点となった順天倭城跡周辺の「干潟」や全羅道と慶尚道を隔てる「大河」蟾津江などを実見しえたことは戦線縮小論を深く理解するうえで有意義であった。史料分析の状況は次のとおりである。朝鮮陣朱印類に収録されている慶長2年8月頃の秀吉朱印状写の分析により、当時の部隊編成および軍目付の構成をほぼ確定しうる知見をえた。慶長の役前半は右軍に従軍した垣見一直・熊谷直盛・早川長政の連署鼻請取状3通も含む黒田長政宛鼻請取状を分析した。

研究成果発表の状況は以下のとおりである。前記の鼻請取状の分析により、研究成果として〔雑誌論文〕を発表することができた。同論文では他の諸將宛鼻請取状と比較することで黒田長政宛鼻請取状の発給者(軍目付)の顔ぶれが多彩である点を指摘し、それは長政が所属する部隊の編成替が何度かあり、その編成替と連動していたとする仮説を提示した。また、〔図書〕収録の論考「朝鮮出兵と長宗我部氏の海洋政策の一断面」を発表することができた。

(3) 3年目にあたる2012年度は前年度までの成果をふまえて、史料調査を含む史料収集と倭城跡の現地調査を実施し、史料の分析も進めた。

史料調査の実施状況は次のとおりである。12月、東京大学史料編纂所において古文書纂などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。

2月、東京大学史料編纂所において対馬古文書などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。現地調査の実施状況は次のとおりである。1月、戦線縮小論で存廃議論の対象となった蔚山倭城および比較的近くの西生浦倭城の城跡などを調査した。この調査により、議論の論点となった蔚山倭城跡周辺の「難所川越」にかかわる太和江などを実見しえたことは戦線縮小論を深く理解するうえで有意義であった。史料分析の状況は次のとおりである。古文書纂の(慶長2)年8月10日付豊臣秀吉朱印状写などの分析により、軍目付の行動とそれに対する秀吉の認識との早期のギャップを確認した。対馬文書の慶長2年7月22日付「番船取申帳」などの分析により、軍目付による戦功報告方法に関する新知見がえられた。

研究成果発表の状況は以下のとおりである。軍目付太田一吉の実態解明と関連する研究成果として〔学会発表〕を公表(招待講演)することができた。軍目付垣見一直の実態解明と関連する研究成果である論考「軍目付垣見一直と長宗我部元親」を収録する単著として〔図書〕を発行することができた。(4)最終年にあたる2013年度は前年度までの成果をふまえて、史料調査を含む史料収集と倭城跡の現地調査を実施し、史料の分析も進めた。

史料調査の実施状況は次のとおりである。4月、東京大学史料編纂所において伊東系譜などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。7月、東京大学史料編纂所において堀内文書などの調査(閲覧・筆写など)を実施した。8月、東京大学史料編纂所において井上文書などの史料調査(閲覧・筆写など)を実施した。現地調査の実施状況は次のとおりである。12月、巨済島海戦の戦場となった漆川梁近くの永登浦倭城跡などを調査した。この調査は、同海戦への陸上部隊参戦の意義を深く理解するうえで有意義であった。史料分析の状況は次のとおりである。(慶長2)年9月13日付豊臣秀吉朱印状写などの分析により、巨済島海戦に伊東勢なども参戦していた事実を確認した。対馬文書の慶長2年7月22日付「番船取申帳」などの分析により、巨済島海戦に参戦した日本側水軍の諸将の全貌、軍目付による戦功報告やこれをふまえた行賞の過程を解明した。

研究成果発表の状況は以下のとおりである。巨済島海戦に関する研究成果として〔雑誌論文〕を公表することができた。朝鮮出兵における論功行賞に関連する研究成果として〔学会発表〕を公表(招待講演)することができた。軍目付の実態解明と関連する研究成果として共著〔図書〕、単著〔図書〕を発行する準備ができた。

以上のような4年間の研究により、朝鮮出兵とくに慶長の役における日本側の軍事行動など史実の確定が大きく進展した。その史実とかかわる軍目付の報告による論功行賞

の実態もほぼ解明された。従来は報告にもとづく秀吉による諸大名の譴責が注目されてきたが、加増などの行賞も実施されていた。軍事行動や論功行賞の実態は、朝鮮出兵の目的・原因といった根本的な問題を研究する重要な前提になる。すなわち、これらは「なぜ戦うか」(村井章介『世界史のなかの戦国日本』)という古くて新しい問いの解答を導くのみならず、朝鮮出兵の原因論として提示されている「イベリア・インパクト」の検証にも資すると展望される。

なお、本研究の研究成果を含む〔図書〕の共著・単著は一般読者も対象としており、これらの刊行は研究成果の社会への還元ともなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

津野 倫明、「巨済島海戦に関する一注進状」、『人文科学研究(高知大学人文学部人間文化学科)』第19号、2013年、査読無、1-16頁

津野 倫明、「豊臣政権の「中国取次」について 山本博文氏の近業に接して」、『織豊期研究』第13号、2011年、査読有、42-52頁

津野 倫明、「黒田長政宛鼻請取状について」、『人文科学研究(高知大学人文学部人間文化学科)』第17号、2011年、査読無、1-21頁

津野 倫明、「軍目付垣見一直と長宗我部元親 軍目付研究の作業仮説」、『人文科学研究(高知大学人文学部人間文化学科)』第16号、2010年、査読無、1-19頁

〔学会発表〕(計 2件)

津野 倫明、「朝鮮出兵の目的に関する覚書」、第74回織豊期研究会報告会、2013年11月30日、愛知県産業労働センター(ウインクあいち)(愛知県)

津野 倫明、「長宗我部氏の研究と「壬辰倭乱」」、高知海南史学会大会、2012年8月5日、高知城ホール(高知県)

〔図書〕(計 6件)

高橋 典幸編(共著者：津野 倫明)、竹林舎、『戦争と平和』、2014年、印刷中

織豊期城郭研究会編(共著者：津野 倫明)、サンライズ出版、『倭城を歩く』、2014年、印刷中

谷口 央編(共著者：津野 倫明)、高志書院、『関ヶ原合戦の深層』、2014年、印刷中

津野 倫明、吉川弘文館、『長宗我部元親と四国』、2014年、総頁数160頁

津野 倫明、吉川弘文館、『長宗我部氏の研究』、2012年、総頁数294頁

高知大学人文学部「臨海地域における戦争
と海洋政策の比較研究」研究班編、(共著
者：津野 倫明) リーブル出版、『臨海地
域における戦争・交流・海洋政策』、2011
年、345-379頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津野 倫明 (TSUNO, Tomoaki)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教
授

研究者番号：60335916